

# 挑戦的な共同研究を刺激する収蔵品

文化人類学の研究拠点である国立民族学博物館（民博）は大学共同利用機関なので、その一義的な目的は大学や分野を超えた研究を推進することにある。したがって、革新的な研究にも積極果敢に挑戦している。会計学者と人類学者との共同研究はそうした挑戦のひとつである。

会計学と人類学は経営学と人文学というそれぞれ大きな枠の中で分離し、従来ほとんど交流がなかった。日本の会計は学校法人会計基準、社会福祉法人会計基準、公益法人会計基準、医療法人会計基準、NPO法人会計基準さらには公会計などが世界で例がないほど乱立している。その中で、企業会計については、国際財務報告会計基準（IFRS）という世界標準の会計が誕生し、グローバルゼーションの影響を受けつつ、個別に発達していった各法人会計に深刻な影響を与え出している。実はグローバルゼーションに伴う個別文化への影響は文化人類学の重要なテーマであり蓄積も多い。同質的な会計学者だけでこの問題を扱うと社会でマジョリティを構成する企業の会計が無条件に良いものとされていくのではないかという思いもあった。また、現在大学を襲うIRをはじめとするアカデミアのアカウントビリティについ

ても、英国の人類学者が「政策の人類学」として研究を行っていたことも本共同研究を後押しした。

会計学者にはいささかお節介な設定ゆえ、会計学者がどこまで関心を寄せてくれるか不透明なままでスタートしたが、そうした心配を消し去ることに役立ったのが民博の収蔵品である。パプアニューギニアの貝貨（写真1）は現在法定通貨として確立し、官・民両方での貝貨と通貨の交換所が設けられたり、納税や学校の授業料支払いにも使用されたりしている。こうした事例は、ビットコインをはじめとする仮想通貨や地域通貨を考える上でも示唆に富む。また、沖縄の菓の結繩（写真2）は庶民に文字を教えない愚民政策の中での会計記録や納税記録として理解されている。これらは新しい分野の研究者にとって、従来学問分野が無意識的に境界内に押し込めていた思考の幅を広げブレイクスルーを生み出す触媒となりかけている。考えてみれば、お金を記録する方法は無数にある中で、複式簿記というノーテーション（表記法）が、ときに、個別文化を駆逐しながら、瞬間に世界を席捲している構図が見えてくる。他分野との学術的な交配によって、学者だけではなく、IFRSを審議した国際組織の日本の理事や税制の国政を預かった者までが議論に参加し、収蔵品等に刺激を受けながら、従来タコツボの中に閉じてしまっていた思考の壁を崩していつている。



写真1 収蔵庫に保管されているパプアニューギニア ニューブリテン島の貝貨



写真2 沖縄で19世紀まで使用されていた菓による会計記録。

結果的に本共同研究は一方で文化人類学者が集めた資料に会計学的重要性を再発見したり、他方で、会計学者の研究を会計学以外から光を当てたりすることにもなった。タコツボ研究の弊害が指摘されて久しいが、大学共同利用機関としての民博の収蔵品がそうした弊害を取り除くことにも一役買っているのである。（出口正之）